
不思議の国の有栖騎士

かぼすパイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議の国の有栖騎士

【Nコード】

N6076D

【作者名】

かぼすパイン

【あらすじ】

有栖は読書家の美少年。だけど本人は目立つ事なんて望んじやない。なんとなく適当に日々を過ごしていたら、いきなり図書館からお花畑に異世界旅行！そこは有栖主人公の物語の中だった！世話を焼かれ、放っておいて欲しいのに誰もが有栖を気に掛ける。何故なら主人公だから。ドロドロに甘やかされたかと思えばさあ魔方阵で戦え！長編ファンタジー

用意するものは魔法陣と鎖です

乾いた風が体をすうっと通り抜ける。

衣服など防寒という目的ではあまり意味のないものではないかとさえ思えてしまう。

それ程に、今日は一段と寒かった。

いよいよ冬も本番か。

一番家から近かったから。

そんな理由で難関高といわれる、この丘瑠斗^{オカルト}高校を受験した僕だが、取り上げて言う程頭がいいというわけではない。

のらりくらりと、面倒な事だけは避けて適当に生きてきた。何事も中間がいいのだ。

良すぎず、悪すぎず。

なるべくなら注目などされずに、

「あゝおはよう、今日ズツゴク寒いねえ」

人付き合いも程ほどに、

「おはよう、今日夕方から雪なんだってえ。あたしさあ……」

それなのに、

「あー有栖^{アリス}、お前今日放課後付き合ってくんね？どーしてもお前連れて来いって……」

どうして

こんな容姿に生まれてしまったばかりに……！

名前も覚えていない、よおーく思い出してみればそういえば見たことあるような顔だなあとといった程度の認識しか持たないこいつらに！
何故朝から囲まれなければならない？

別に僕は金とか銀とか特殊な髪を持つわけでもない。

真っ黒な髪にこれまた真っ黒な目。普通だ。至ってふつう。

高めの身長に細くも全く筋肉がないと言っわけではない白い体。

ただ、髪の毛は長く、襟足を一つに束ね、前髪も目に掛かってしまう長さなので左右に避けてある。

何故そこまでして髪を伸ばすのかというとまた長い話になるからまたの機会としよう。

「おはよ。悪いけどさ、放課後は僕図書室に用があるんだ」

何だよ、愛想わりいなあなんて思われてもいけない、

だけど放課後の貴重な時間を割いてまで、こいつらに付き合う事もない。

僕は適当な笑顔を振りまいて席に着く。

僕の姿を目に留めた何人かが話しかけにこようとするが
だけど僕だって何も考えていないわけではない。

誰も僕に話しかけないままチャイムだけが鳴り響いた。

教室にはギリギリで入るようにしている。

家が近い分、時間の調整も思いのままだ。

退屈だ。

退屈。

だけど僕は授業中に眠ったりなんてしない。

精々窓の外を眺めているか、じいっと時計と睨めっこしているかのどちらかだ。

休み時間は本を読んで過ごす。僕は読書家だ。

僕じゃない物語の中で人生を生きる。ページを捲る音、紙のにおい。誰が話しかけてきても大抵は無視してしまう。

これは問題ない。事前に僕は本に集中すると周りの声が聞こえないんだと言っている。広めたつもりはない。広まっていたのだ。これを利用しないでどうする。

退屈な授業を終え、僕は放課後を迎える。

この放課後の為に僕は学校に來ているといっても過言ではない。

ここ、丘^{オカルト}溜斗高では、放課後に限って図書館が開放される。

校舎とは別に建てられた図書館は、高い高い天井に向かってぐんぐんと伸びるようにして階段が続いており、その階段脇に本棚があるのだ。

だから、外観は物凄く縦長い。

本の数はなんとどの高校よりも多いらしい。

これは僕が入学してから知ったことだ。

「思ったより、きつい、な……」

今日、僕は最上部まで行ってみるつもりだった。
しかし普段からあまり運動をしない僕には結構な事だ。
階段を登るだけで息があがるとは。

もう少しだ、という所で、一冊、本棚から階段へと落ちているその本。

戻しておこう、と手にとって何気なく開いたページに目をやる。

「何だ、これ…？ 『用意するのは魔方阵と鎖です、』

よく分からない記号やらで埋め尽くされたその本で、唯一読める日本語の場所に目をやる。

円のような書かれているそれは魔方阵とやらなのだろうか。

「『有栖の国、不思議の国の』って痛ええ！」

上から突如降ってきたそれ、何か、重くて冷たくて長い、これは…
…？

ふ、とそこで真っ白な靄が僕を包み込むかのように、ゆっくりと意識が途切れていくのが分かった。

古い紙のにおいにかわって、甘い花の香。

すぐに意識を取り戻したように思う。

眠っていたのなら感覚は当てにならないが、途切れたのはあの一瞬

だけ。そんな何の根拠もない感じがあった。

目を開けてまず視界に入ってきたのは、一面の花畑。

紫を基調としたそこは、まるでおとぎの国の世界のようなだった。

「な……っ!？」

止まった思考回路のまま、取り合えず体を起こそうとして僕は『それ』に気付く。

体中にまきついていているそれ。

鈍く煌くそれは重い鎖だった。

「捕獲」

頭上短く小さな声がする。

「異世界にようこそ。有栖^{しゅうせい}」

につこりと陽の光をあびて微笑むのは、僕よりいくつか年上だろう、金髪碧眼。それこそ物語の中の王子様みたいな奴だった。

異世界では美形に注意しましょう

「さあ行こうか。宇佐木^{うさき}が待ちくたびれてる。君が来るのをとても楽しみにしていたからね。遅くなれば僕がどやされる」

随分と饒舌な王子様だ。

きらきらと金の髪を靡^{なび}かせて、僕には理解できない事をひたすらに話してくる。

僕が聞いているかどうかなど関係ないともいつかのように、それはもう一方的に。

「それで、この変な世界に僕を呼んだのはあなたですか？」

面倒なことに巻き込まれそうな予感がする。

異世界に来て、それでいて美形に出会うつろくなことはない。

本を多く読んでいる僕に言わせてみれば、これから何かと戦えだとか、お宝を探して来いだとか、君は選ばれし者だー！とかそんな展開になりえない。

そうなる前に、うまく交渉してみよう、面倒くさいことはごめんだ。

「何故そう思う？」

「だってあなたがここの王子様なんじゃないですか？」

「まさか！アハ、ハハハハ、この世界にそんなものはないよ、強いて言うならば君がその存在に近い」

どうやら笑い上戸らしい。何をそんなに面白がるのかは分からないが、僕の顔を見てはくすくすと笑う。

「帰してくれませんか」

「それは無理」

きつぱりと即答されてしまう。

「僕の都合はどうなるんですか」

「そんなもの関係ないよ。君はただ座ってるだけでいい」

「はあ？」

ただ座ってるだけ。

それだけの為に僕を呼んだのだとしたら迷惑な話だ。

僕は面倒な事も嫌いだが、退屈も嫌いなのだ。

何事も中間が一番。程よく適当に過ごせればそれがいい。

「それより、よく分かったね、ここが異世界だって。順応が早い」
まるで値踏みするかのような無遠慮な視線。

「こんな広大な花畑はともかく、空まで紫だなんて僕の世界では在り得ない」

「ここが君の世界だよ」

につこりと有無を言わせぬ笑みで言われて有栖はぐっと言葉を飲み込む。

「とりあえず、この鎖を解いてくれませんか」

言った後で何故僕がこんな奴に敬語など使っているのかと気付く。

「それも無理」

「冗談じゃない」

「そう、文字通り、『冗談ではない』

こんなところにあと少しでも居たら君は死んでしまうし、僕は宇佐木ともう口も利いてもらえなくなる」

にこ、と微笑みそう言つと、そいつはじゃらじゃらと腕に巻きついたりたやたら重そうな鎖を解き、早口で何か呟く。

僕の知らない原語だった。

とたんに強い光に襲われて、僕は目を開けていられずにきつく目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6076d/>

不思議の国の有栖騎士

2010年10月28日08時40分発行